

「ゴーン・アイデンティティ」

峯邦雄

## 登場人物

生ごみ男

陸奥陽平 (20)

大学生。インド哲学科。

マスター (47)

純喫茶ナイン経営。

一柳新一 (32)

女子高教師。

一柳里香 (32)

その妻。妊娠中。

多田周子 (25)

女子高教師。

加藤健三 (49)

女子高教師。

加藤美智子 (46)

その妻。

加藤奈奈美 (20)

その娘。大学生。

三井豊 (28)

シェアハウス住人。

四谷一樹 (27)

シェアハウス住人。

後藤悦子 (26)

シェアハウス住人。

八木修 (32)

死刑囚。

近江正和 (50)

看守。

本間宏 (60)

本間康子 (58)

その妻。

本城小百合 (17)

女子高生。ぼっちゃり。

まり子 (17)

女子高生。

博美 (17)

女子高生。メガネ。

美由紀 (17)

女子高生。

内閣総理大臣、総理秘書官、法務大臣、法務省役人、脳科学者、産婦人科医師、看護師、教師1、教師2、女子高生たち、女子アナ、本間まどか (声のみ)

○夜空

―を横切る彗星。異様なほどゆっくりとしたスピードで進んでいく。

○ユーチューブ画面

その彗星が映し出されたTVのモニターをさらに撮影した映像。

タイトルは『生ごみ男の日記#94』。

生ごみ男（声）「（異様に明るい声で）キテますねー。流星？ 彗星？ どっちでもいいけどー。外に出ないで、あえてTVで見るところが生ごみ男の粹つつうやつなわけですよ、皆さーん」

画面すみにチラッと映りこむマグカップ。

○陸奥の部屋（夜）

狭いアパートの一室。

ベッドに寄りかかり、TVを見ている

陸奥陽平（20）。

マグカップに入った梅酒のお湯割りを  
ちびちびと飲んでいる。

TV画面―彗星。

女子アナ（TV）「きれいですねー」

○山の中腹（夜）

ドライブウェイの途中にある休憩所。  
多くの車が集まり、人々が夜空を見上  
げている。

そのうちの一台―車に寄りかかり、3  
人の男女が夜空を見上げている。

三井豊（28）、四谷一樹（27）、

後藤悦子（26）。

3人ともうつとりした表情。

と、突然、彗星が砕け散り、空全体に  
光が広がる。

夜空を見上げていた人々が同時に気を  
失い、倒れる。

○陸奥の部屋（夜）

屋内にいた陸奥もまた気を失い、動かなくなっている。

こぼれた梅酒。

TV画面―夜空だけが静かに映し出されて  
れている。

○一柳家・寝室（朝）

マンションの上階。

ベランダに倒れている一柳新一（32）

―目を覚ます。

あたりを見回すが、ここがどこかわからない。

一柳「・・・」

揺れる白いカーテン。

その向こうに寝室とベッドが見える。

一柳、カーテンをぐり抜けて、室内へ。  
へ。

ベッドで眠る一柳里香（32）。

一柳「・・・」

と、風で里香が目を覚ます。

眠そうな目……。

と、そばに立つ一柳を見て、

里香「！（驚）」

反射的にシートで身を守るようにして、

里香「誰？！ 何してるの！」

一柳「え…… 誰って…… あれ？」

里香「警察！ 呼びますよ！」

と、サイドボードの電話を取ろうとして、サイドボードの電話を取ろうとして、  
てーフトフレームに気がつく。

一柳と里香が幸せそうに寄り添う写真。

里香「……」

一柳「いや、あの…… あれ？ 誰？」

里香「……」

一柳「ここ、どこだ？」

里香「え……」

一柳「オレ、誰だ？ ここ……」

里香「どこ？」

一柳「え？」

里香「私…… 誰？」

一柳「え……」

と、里香の手が自分のおなかにふれて、  
あることに気がつく。

里香「え・・・」

里香、自分のおなかを見る。一柳も。  
シーツの下のおながが大きい。

○ラブホテル・その一室（朝）

あわてて白いシャツのボタンをとめる  
多田周子（25）。

チラチラと警戒するように動く視線の  
先―大きなベッド。白いシーツが盛り  
上がり、男の足がはみ出している。

周子、ジャケットとバッグを抱えて、  
逃げるように部屋を出て行く。

ドアが閉まる音―で目を覚ますベッド  
の男。加藤健三（49）。

加藤「・・・ん？」

加藤、シーツの中から身を起こす。

加藤「・・・あれ？ どこだ、ここ？」  
と、手に何かひっかかっている。

持ち上げてみると・・・ブラジャー。

加藤「・・・」

○同・エレベーター内（朝）

緊張した表情の周子。バッグとジャケットをギュッと抱きしめている。

1階ロビーに着き、ドアが開く。

○同・ロビー（朝）

若い男と従業員が押し問答している。

従業員「だから、名簿とかないんですよ。そ

ういうホテルじゃないでしょ、どう見ても」

若い男「じゃあ、どうすりゃいんだよ」

従業員「オレが聞きたいよ！」

周子、騒動を避けて、逃げるように出て行く。

○繁華街（朝）

昨夜から街にいた人々が、自分が何者かわからず右往左往している。

その中を足早に通り過ぎる周子。

と、交差点の信号が赤に変わる。

周子、立ち止まる。

周子「・・・（あ）」

自分が赤で止まったことに気づき―

周囲を見ると、やはり人々は赤信号で

立ち止まっている。

周子「赤は、止まれ・・・」

信号が青に変わる。

周子「青は、進め・・・」

脳科学者の声「記憶の喪失は部分的なもので  
す」

○TV局・スタジオ（後日）

少数のスタッフ―

カメラに向かって語りかける脳科学者。

脳科学者「知識や常識と言われるものは残さ  
れています。だからこそ、いま私がこうし  
て脳科学者としての意見が言えるわけです  
し、ここにいるスタッフの皆さんも magari

なりにも仕事ができているわけです。全世界的な現象にもかかわらずこの一週間、人類が滅亡するほどの災いを招いていないのもそのおかげと言えるでしょう」

○ラブホテルの一室（現象当日）

加藤がベッドの上に自分の所持品を並べている。

スーツ、かばん、財布、携帯・・・  
ブラジャーも一応並べている。

財布に入っていた免許証から、自分が

加藤健三だと言っていることがわかる。

加藤、携帯の着信履歴の中から「家」  
を選択し、かけてみる。

呼び出し音が続き―つながる。

加藤「あ、もしもし、あの、そちら、加藤さんのお宅でしょうか？ あ、私、加藤健三と申しますが・・・」

脳科学者の声「しかし、問題はここからです」

○それぞれの朝

交差点に呆然とたたずむ周子。

寝室でうろたえるばかりの一柳と里香。

部屋の中でぼんやりしている陸奥。

山の中腹で右往左往する三井、四谷、

悦子。

それらの光景に、脳学者の声が重なる。

脳学者の声「我々が失ったものの大きさは

これから痛感されます。知識や常識と呼ば

れるものは維持していますが、肝心の自分

が誰かがわからない。自我を失ったのです。

車は運転できても家の場所がわからないの

です。記録を見て確かめなくてはならない

のです。たとえ家に帰れたとしても、そこ

に住んでいた記憶はない。家族みんなが赤

の他人に見えるでしょう。さらに誰よりも

鏡にうつる自分自身に違和感を感じること

でしょう」

○TV画面

脳科学者、しだいに熱くなる――

脳科学者「自我を失った全人類が、これまで若者の特権、あるいは若さゆえの無駄な行為とされていた、自分さがしの旅をせざるを得なくなっただのです。何とめんどくさい！」

○メインタイトル

『ゴーン・アイデンティティ』

○総理官邸・執務室

TV画面―身振り手振り、熱弁をふるい続ける脳科学者。

ぼんやり見ている内閣総理大臣。

と、総理秘書官がやって来る。

秘書官「総理」

総理「・・・（気づかない）」

秘書官「総理」

総理「え！ ああ、オレか。ああ」

秘書官「まもなくです」

総理「ああ・・・」

秘書官「大丈夫ですか？」

総理「大丈夫じゃない」

秘書官「・・・」

総理「何で？ 何でオレが総理？」

秘書官「またですか・・・」

総理「無理だよ・・・」

秘書官「確認しましたよね？ ご自分の意思  
だって」

総理「そうだけど・・・」

秘書官「では、肅々と、お願いします」

○純喫茶ナイン・店内

昭和の香りのするたたずまい。

客はいない。

カウンターでマスター（47）がコー

ヒーを淹れている。

と、陸奥が入ってくる。

マスター「いらつしやいませ」

陸奥「あ、こんにちは・・・」

マスター「どうぞ、お好きな席へ」

陸奥、少し考えて、カウンターのマスターの前に座る。

マスター、水とメニューを出しー

マスター「準備ができてないメニューもあるんですが」

陸奥「あ、あの、これを」

と、ポケットから十二枚つづりのコインを出す。

陸奥「よく来てた、みたいなんですけど」

マスター「ああ、ありがとうございます。ど

うぞ、座ってください」

陸奥「あ、はい。あ、僕、陸奥、陽平といいます」

マスター「陸奥さん」

陸奥「はい。何か、見覚えとか、ないですよね」

マスター「ごめんなさい。自分のこともおぼえてないもんで」

陸奥「あ、いえ、大丈夫です」

マスター「ブレンドでいいですか？」

陸奥「あ、はい・・・（座る）」

カウンターのすみに置かれたTVに目を向けると――

異変後初閣議のニュースが流れている。

女子アナ（TV）「IBO、いわゆるアイデ  
ンティティブラックアウト後に閣議が開か  
れるのは初めてで、総理をはじめ閣僚は緊  
張した面持ちで・・・」

TV画面――そわそわと落ち着かない様  
子で席に着く閣僚たち。

○加藤家・リビング

TVで閣議のニュースが流れている――  
女子アナ（TV）「総理は全閣僚に対して、  
粛々と責任を果たすよう・・・」

ソファに座り、ぼんやりとTVを見て  
いる加藤。

間続きのダイニングキッチンでは、妻  
の美智子（46）がアルバムを開いて

いる。

家族の思い出―

生まれたばかりの娘・奈奈美を抱いた  
写真から成人式まで・・・

美智子「・・・」

どの写真にも見覚えはなく、戸惑って  
いる。

美智子、アルバムを閉じて―

美智子「お茶、いれましようか・・・」

加藤「あ、すみません・・・」

二人の会話はぎこちない。

と、奈奈美（20）が入って来る。

奈奈美「あの・・・」

加藤「あ・・・」

美智子「あ。なな、みちゃん。お茶、いれま

すけど」

奈奈美「あ、私、出かけるので」

美智子「あ・・・」

奈奈美「友達と、会ってきます」

美智子「そう・・・。気をつけてね」

奈奈美「じゃあ・・・」

美智子「いつてらっしゃい」

奈奈美「いつてきます・・・」

奈奈美、玄関へードアの開閉音。

美智子「・・・お茶、いれますね」

加藤「はい・・・。あ、いや、やっぱり、自分で」

と、言いながら、キッチンへと歩いていくがー

美智子「いいですよ。座ってて下さい」

加藤「・・・そう、ですか？」

美智子「はい」

美智子、お茶の用意をし始める。

加藤、手持ち無沙汰なのか、何気なくアルバムを手取るがー

加藤「・・・」

加藤にとっても見憶えのない場面ばかりだ。

○一柳家・寝室

ベッドに座り、夫婦の写真を見つめる

里香。

と、ドアがノックされて―

里香「は、はい（立ち上がる）」

一柳の声「じゃあ・・・行ってきます」

里香「あ、はい・・・」

一柳の声「あの、何かあったら、僕の携帯に

電話してください」

里香「はい。すみません・・・」

一柳の声「じゃあ・・・行ってきます」

里香「いってらっしゃい」

廊下を歩き去る足音―

里香「・・・」

里香、座りなおす。

おなかをそつとさわってみるが―

里香「・・・（違和感）」

○同・玄関

スーツの一柳、ドアを開けて―

ふと振り返り、寝室の方を見る。

一柳「・・・」

里香のことが気になるが、出て行く。

ドアが閉まりー

○シェアハウス・玄関内

ドアが開きー

三井、四谷、悦子が入ってくるー3人とも彗星を見ていた夜と同じ服装。

玄関を入ってすぐに広いリビングとダイニングキッチン。2階へつながる螺旋階段。

三井「おっしやれー」

四谷「テラスハウスだな」

三井「くだらねえことおぼえてるなあ」

四谷「自分の名前はおぼえてないくせにな」

二人が話している間にも、悦子は室内を確認して歩く。

三井「（悦子を見ながら）やっぱ、かわいいな、えっちゃん」

四谷「ああ。わいかー」

三井「マジ、オレたちどういう関係なんだろうな」

四谷「まあ、どっちかが、カレシ？」

三井「か、どちらも単なる同居人か」

四谷「それはないだろー」

三井「ないな、うん」

四谷「てか、どっちが勝者でも、うらみっこなしな」

三井「てか、どちらも勝者かもよ」

四谷「マジか。やべー」

三井「やべーよ」

二人のそんな様子に悦子は気づかずー

悦子「2階、見てみよ」

と、階段を上がっていく。

三井と四谷もニヤニヤお互いをつついたりしながらついていく。

○ユーチューブ画面

タイトルは「生ごみ男の日記 #80」。  
うす暗い山道を進むカメラ。

生ごみ男（声）「山に来てます。グッドな死に場所さがし中ですよ」

画面に梅酒の缶が映りこみ、

生ごみ男（声）「もちろん、梅酒いただいてます」

飲みながら歩くがー

生ごみ男（声）「何か、気味悪いすねー。こりゃ無理かなー。やっぱやめとこっかー。ってか、ここ、どこー？」

#### ○法務省・大臣執務室

大臣の判を手に、眉間にしわを寄せている法務大臣。

彼の前に置かれた死刑執行の書類（脇にも書類が山積みになっている）。そばで法務省の役人が待っている。

法務大臣「・・・どうすればいいんだ」

役人「粛々とお願いします」

法務大臣「かんとんに言うね」

役人「役人ですから」

法務大臣「何で私が法務大臣なんだ？」

役人「総理のご判断です」

法務大臣「資料見たる？ 何度も死刑制度の見直し集会に参加してるんだよ」

役人「はい」

法務大臣「おかしいじゃないか、そんな人間が法務大臣なんて」

役人「・・・」

法務大臣「大臣のポストに目がくらんだか、それとも、死刑制度反対に大臣のポストを利用しようと思ったか、どっちにしても・・・」

役人「・・・」

法務大臣「ああ、どうすればいいんだ」

役人「粛々と職務を執行していただければ」

法務大臣「冷たいな」

役人「役人ですから」

法務大臣「・・・」

―やけくそのように押される判。

○死刑囚監房・独房内

呆然と座り込んでいる死刑囚・八木修  
(32)。

彼を取り囲む無機質な壁、頑丈な扉。

○霊園

墓石が立ち並ぶ―

そのうちの一つに手を合わせる、本間  
宏(60)・康子(58)。

本間が顔を上げて、康子はまだ目を  
閉じて手を合わせたまま―

康子「ごめんなさい・・・」

本間「・・・」

○純喫茶ナイン・店内

コーヒーを飲む陸奥。

マスター「いかがですか？」

陸奥「え？」

マスター「今日のブレンドは」

陸奥「あ、美味しいです」

マスター「そうですか・・・」

陸奥「はい・・・。マスター的には？」

マスター「うーん、いまひとつしっくりこないというか。あ、飲ませといて、こんなこと言っちゃいけないんですけど」

陸奥「あ、いえ、大丈夫です」

マスター「いれ方は間違えてないと思うんです。でもね、何か違う。ような気がする」

陸奥「自我、ですか」

マスター「はい。例えば、隣の蕎麦屋さん。老舗の三代目で、蕎麦を打てることは打てるそうなんですよ。私も食べてみましたが、美味しいもんです。でもね、ご主人に言わせると、やっぱり何か違うらしいんですね。ご主人は、魂の問題じゃないかって言っていましたけど」

陸奥「魂・・・」

マスター「ええ。知識としておぼえている技術と、こう、自分の中から湧き出てくる、そういうものは違うんじゃないかって」

陸奥「なるほど・・・」

マスター「ピアニストとか画家とか、アーティストの人はもつと悩ましい状況なんじゃないですかねえ」

陸奥「ピカソの絵なんて、技術だけじゃ描けませんもんね」

マスター「そうそう、それ。あ、いや、私はそんなにご立派なもんじゃないですけどね」

陸奥「いえいえ・・・（と、時計を見て）

あ、そろそろ・・・」

マスター「お出かけですか？」

陸奥「はい。大学の方へ、行ってみようかと」

マスター「あ、学生さんだったんですね」

陸奥「そうみたいです・・・」

マスター「学部は？ 何を勉強してるんですか？」

陸奥「それが・・・文学部の、インド哲学科だそうで」

マスター「へえ・・・。インド哲学って？」

陸奥「・・・さあ」

マスター「・・・」

○ユーチューブ画面

タイトルは「生ごみ男の日記 #63」。  
平日昼間の公園。子供を遊ばせている  
母親たち―をベンチから撮影している。  
生ごみ男（声）「大量殺人とかやったら、楽  
に死刑になれるのかな―。とか考えてま―  
す」

と、母親たちがカメラに気づき、怪訝  
な表情を浮かべる。  
あわてて逃げ出すカメラ。

○女子高・外観

○同・職員室

教師たちが集まっているが、落ち着か  
ない様子。

特に男性教師は居心地が悪いらしい。

教師1「しかし、きついですな」

教師2 「まさか、自分が女子高の教師だと

は・・・思いもしませんでした」

同じく男性教師である加藤と一柳が窓

際でお茶を飲みながら話している。

一柳 「加藤先生のおうちは、奥様と・・・」

加藤 「あ、娘がひとり。大学生だそうです。

びつくりですよ」

一柳 「そうですか・・・」

加藤 「一柳先生は？ お子さんは？」

一柳 「あ、まだ・・・」

加藤 「ああ、それはまだラッキー」

一柳 「あ、いや、妊娠中で・・・」

加藤 「ああ・・・それは驚いたでしょう」

一柳 「はい。いや、私より、妻の方が、かな

り戸惑っているようで」

加藤 「でしょうねえ・・・（自分の腹をさわ

る）」

○一柳の回想・産婦人科医院

モニターで胎児の様子を見る一柳夫妻。

二人とも呆然とした表情――

そんな二人を見ていた医師が、

医師「DNA鑑定なさいますか？」

一柳「え？」

医師「あ、一応、おすすめてるんですよ。

皆さん、実感がないようなので……」

一柳・里香「……」

（回想終わり――）

○女子高・職員室

加藤「うちも何だかねえ。他人同士が暮らし  
てるのと変わらないし」

一柳「ああ……」

と、そんな二人の方に向けられた視線

――多田周子。

加藤が気づき、目が合う。

周子、あわてて目をそらすと、机の上  
の名簿を持って、職員室を出て行く。

加藤「……」

○同・廊下

周子、足早に歩き去る。

その後を追うようにチャイムが鳴る―

○死刑囚監房・独房内

八木と看守・近江正和（50）―

八木「（ため息）」

近江「・・・」

八木「何もおぼえてないんすよ」

近江「・・・」

八木「死刑って・・・いきなり言われても」

近江「・・・」

八木「何とかならないんすか？」

近江「難しいと思う」

八木「・・・」

近江「せめて、君に納得して刑を受けてもら

えるよう・・・」

八木「納得って・・・」

近江「資料を持ってきた」

八木「資料？」

近江「君が犯した罪に関する資料」

近江、分厚い束になった資料を差し出す。

八木「……（怖くて受け取れない）」

○一柳家・リビング

ソファに座る本間と康子。

里香の学生時代のアルバムを見ている。

里香とサークルの仲間たち（男女）が

楽しそうに写っている。

本間と康子、戸惑いを隠せない。

と、里香がDVDを持って来る。

里香「ありました。たぶん、ここにも映って

いると思うんですけど」

本間「ありがとうございます」

康子「すいません。大変な時に……」

里香「いえ」

里香、DVDをプレイヤーにセットし、再生。

里香と一柳の結婚式の様子が流れる。

里香「・・・」

早送り―

里香「あ」

ストップ、少し巻き戻して、再生―

女の声「まどかです」

里香、夫妻を見る。

本間「・・・（うなづく）」

まどか（声）「里香―、おめでとうー」

本間夫妻、ジッと画面を見つめている。

里香、そっと離れて―

キッチンで二人のためにお茶をいれ始

めるが・・・

大きな音がして―

本間夫妻が振り返る。

キッチンで里香がおなかをおさえてう

ずくまっている。

本間夫妻、あわてて里香のもとへ―

○大学・構内

学生たちが行きかう―

誰もが新入生のような不安げな表情。

陸奥、掲示板のそばのベンチに座り、  
行きかう学生たちを見ている。

誰かをさがしているらしい。

陸奥「・・・」

○ユーチューブ画面

タイトルは「生ごみ男の日記 #25」。

テーブルに並べられた梅酒いろいろ。

生ごみ男（声）「えー、いろいろ買ってき  
ました、梅酒ー。今から飲み比べてみよう  
と

思いまーす」

とりあえず一杯、マグカップに入れて、  
飲んでみる。

生ごみ男（声）「あぁー、これは、酸味がき  
ついですねー」

○シェアハウス・2階

3つある部屋のうち、階段にいちばん  
近い部屋のドアを開ける悦子。

ピンクの壁紙―いかにも女の子といったものであふれた部屋。

悦子「・・・」

三井と四谷も入ってくる。

三井「あ、かわいいー」

四谷「えっちゃんの部屋だよね」

悦子「・・・そうかな」

四谷「え？」

悦子「何か、気持ち悪いんだけど、あたし、  
こういうの」

四谷「え・・・」

三井「いやいや、合ってると思うけど」

四谷「かわいいじゃん」

三井「うん」

悦子、部屋の中を調べ始める。

四谷「（三井に）てか、お前の部屋じゃない  
の？」

三井「おいおい（笑）」

と、悦子がクローゼットを開ける。  
その中を見て―

四谷「え・・・（絶句）」

三井「おいおい・・・（呆然）」

○女子高・2階・教室

生徒たち―

席にはつかず、少人数ずつ固まり、話している。

写真を見せ合って「うちら仲良かったよね」と確認している者もいる。

誰もが不安げで笑顔はない。  
と、周子が入ってくる。

生徒たち、いつせいに黙り、周子を見つめる。

周子「あ（動揺）、えっと、おはよう、ございます・・・」

生徒たち、口々にぼそぼそと「おはようございます」―

周子「あの、担任の、多田周子です。はじめまして。あ、いや、よろしく願いします」  
生徒たち、また口々にぼそぼそと「お

願います」――

周子「えっと、じゃあ・・・」

周子、黒板に名簿をはりながら――

周子「とりあえず、今日は窓側から、名簿順に座ってください」

生徒たちの間に動揺が広がる。

周子「？」

生徒たち、ざわつきながらも自分の席に向かって動き出す――

生徒の一人、まり子（17）が、

まり子「いや！（叫ぶ）」

周子「（狼狽し）え？ 何？ どうしたの？」

まり子「いやです！」

周子「え？ え？ 何が？」

まり子「ここ、あたしの席じゃありません！」

周子「え？」

周子、まり子のそばへ行き、彼女が

拒否している席を見る。

窓際のいちばん後ろの席――

机に殴り書きされた文字――

「死ね」「ブス」「メガネざる」――

周子「……」

まり子「あたし、いじめられてなんかない

し！」

周子「……」

○大学・構内

奈奈美と女友達が歩いていく――

その姿を見つめる視線。

女友達が校舎の中に消えたのを見計ら

って、奈奈美に歩み寄り――

陸奥の声「あ、あの」

奈奈美が振り返ると、陸奥が立っている。  
る。

奈奈美「……？」

陸奥「加藤、奈奈美さん、ですよね？」

奈奈美「……はい」

陸奥「あ、あの、僕、陸奥陽平といいます」

奈奈美、一瞬、（あ）という表情。思  
い当たるふしがあるらしい。

が、すぐに表情を隠して―

奈奈美「はい・・・」

陸奥「あ、あの、見てもらいたいものがあるんですけど」

と言って、スマホを出し、写真を見せる。

仲良く並んだ陸奥と奈奈美。

奈奈美「・・・」

同じような写真が何枚もある。

陸奥「あ、あの、僕たち、つきあってたんじやないかと思うんですが・・・」

奈奈美「・・・」

陸奥「どうでしょう？」

奈奈美「・・・」

○ユーチューブ画面

タイトルは「生ごみ男の日記#19」。

梅酒をマグカップに注ぎ、お湯で割る。

生ごみ男（声）「えー、ビールはですねー、

あの独特の苦味が合わないようなので、梅

酒にしてみましたー。はははー。では（飲むー）・・・お。これは・・・美味いかも」

○死刑囚監房・独房内

自分が犯した犯罪の資料を見ている八木。  
木。

あまりのおぞましさにー

八木「うそでしょ・・・」

近江「・・・」

八木「僕がこんなこと・・・」

近江「残念だけど、事実だと・・・」

八木「何で・・・」

近江「もう少し先のページに、動機についての供述がある」

八木「・・・」

ページをめくろうとするが、手が震える。

近江「・・・」

○女子高・2階・教室

落書きされた机を拒否するまり子。

まり子「絶対座らないかんね！ あたし、いじめられてないもん！ そりゃ、ブスかもしれないよ！ ブスかもしれないけど、メガネはかけてないもんね！ メガネざるじやねえーし！」

メガネをかけている生徒たちの間に緊張がはしる。

他の生徒たち、メガネをかけている者の顔を疑惑の目で見る。

と、博美（17）がそつとメガネをはずして、隠そうとする。

それを美由紀（17）が見つけて、

美由紀「ちよつと、何してんの？」

博美「・・・」

美由紀「先生、この人、メガネ隠してます！」

周子「え・・・」

生徒たちの視線がいつせいに博美へ――

博美、激しく動揺して、

博美「ち、違います。あたし、ふだんはかけ

てないんです。ふだんはかけてなくても黒板も見えるし！でも、今は名簿見ないといけないから！だって、名簿の字、ちっちゃいし！」

まり子「言いわけ、あやしいー」

博美「違うもん！本当に、ふだんはかけてないもん！」

美由紀「ふだんのことなんて誰もおぼえてねーよ！」

博美がせめられているすきに、他のメガネをかけている生徒もメガネをそつとはずしたりする。それを見つけた生徒がまたとがめて・・・

まり子「メガネごまかし禁止！ダメよ！」

動かないで！」

あちこちでもみあいとなり、しだいにメガネ女子たちをその他の生徒たちが追い込む形になっていく。

何もできずおろおろするばかりの周子と、その時、ぽっちゃり女子・小百合

(17) が進み出て―

小百合「もういいよ」

周子「・・・」

生徒たち、動きを止める。

小百合、落書きだらけの席に座り―

小百合「とりあえず、ここにはあたしが座ります」

周子「・・・」

小百合「あたし、メガネもかけてないし、ブスでもないから、こんな落書き気にしないし。あ、異議は認めない。彼氏はかわいいって言うてくれてるからね。確認済み」

生徒たち、黙りこむ。

小百合「これでいいんじゃないですか？ 先生」

周子「・・・」

小百合「とりあえず、後は自由席ってことで生徒たち、あわてて席につき始める。」

周子「ダメ・・・」

生徒たち、聞こえない。

周子「ダメよ・・・ダメダメ！」

生徒たち、動きを止める。

周子、小百合が座っている机に近づき、

周子「えっと・・・」

小百合「小百合です。本城小百合」

周子「本城小百合さん。立って」

小百合「え？」

周子「立って」

小百合、立つ。

と、いきなり周子が机を持ち上げる。

小百合「え」

生徒たち、驚く。

周子「ぬうううう！（重い）」

ふらつきながらも、そのままベランダ

へー

周子「だあああああ！」

外へ投げ捨てる。

生徒たち、呆然。

周子「はあ、はあ・・・」

キッと生徒たちに向き合い、

周子「いじめなんかない！ この教室にはいじめなんかないの！ 私が許しません！  
わかった？」

生徒たち、呆然としたまま、うなづく。

○同・校舎の外・教室の窓の真下

地面に叩きつけられて壊れた机―

を、呆然と見つめている加藤。

一柳が駆けつける。

一柳「どうしたんですか？」

加藤「あ、いや、空から……」

と、携帯の着信音。

一柳「あ……（出る）もしもし？ え？

あの、どなた…… え？ ほんまです

か？ あ、いや、あの、妻は？ 大丈夫で

すか？」

加藤、校舎を見上げる。

ベランダから顔を出した周子と目が合う。

加藤「……」

その背後で駆け出す一柳。

○大学・構内

奈奈美と陸奥―

陸奥「・・・どうかな？」

奈奈美、少し考えて―

奈奈美「陸奥さん」

陸奥「はい」

奈奈美「正直に言います。私も、自分のメールとか、全部見直しました。でも、アドレス帳にもどこにも、陸奥さんの名前はありませんでしたし、履歴にも残っていませんでした。メールも、たぶん消去したんだと思います。陸奥さんも、そうじゃないですか？」

陸奥「・・・」

奈奈美「一通だけ、たぶん、最後に来たメールだと思うんですけど、それだけが残ってました。残してたんだと思います。自分の身に、何か、起きた時のために」

陸奥「……」

奈奈美、スマホを操作して――

奈奈美「これです」

陸奥に渡す。

陸奥、自分が奈奈美に出したであろう

メールを読む。

陸奥「……」

読み進むにつれて顔が青ざめていく。

奈奈美「……」

陸奥、スマホを奈奈美に返し――

陸奥「ごめんなさい」

深々と頭を下げる。

奈奈美「……」

陸奥「もう、二度と、あなたの前に顔を出し

ません。本当に、すいませんでした」

奈奈美「……」

陸奥、立ち去ろうとするが、

奈奈美「あの」

陸奥「……（立ち止まる）」

奈奈美「私も、忘れます」

陸奥「……」

奈奈美「実際、忘れてるし。このメールも消去して、忘れます」

陸奥「……」

奈奈美「だから、陸奥さんも、忘れてください」

陸奥「……はい」

陸奥、走り去る。

奈奈美「……」

○ユーチューブ画面

タイトルは「生ごみ男の日記#03」。

公園のすみ・夜。金属のゴミ箱の前  
に手編みのセーターが映りこむ。

生ごみ男（声）「手編みのセーターです。

よくこんなもん着て大学行ってたと思いま  
すよねー。だっせー。ということで、焼き  
まーす」

セーターに火がつけられ、一気に燃え  
上がる。

生ごみ男（声）「うあっちっ！」

あわててゴミ箱に放り込む。

ゴミ箱の中のゴミにも引火して―

カメラ、あわてて逃げ出す。

○TVモニター

映し出されるプライベート・ビデオ。

暗い部屋―

ドアが開き、悦子が入ってくる。

その瞬間、明かりがつき、

三井と四谷の声「サプライズ！」

クラッカーが鳴り響く。

驚く悦子。

シェアハウスの中は飾り付けられて、

リビングのテーブルにはケーキ、料理

と酒が用意されている。

悦子を迎える三井と四谷。二人とも、

ピンクの部屋着に派手な帽子とかつら。

三井「ハッピーバースデー」

四谷「おめでとー」

二人とも完全に女の言葉、ふるまい。

悦子「何、何ー？ 今日仕事じゃなかったの？」

三井「そんなわけないじゃん」

四谷「エッチーの大事なバースデーだよー」

○シェアハウス・リビング

TVモニターに映し出されるサプライズパーティーの映像を見ている三井、

四谷、悦子。

三人とも呆然としているが、特に三井と四谷の衝撃は計り知れず、二人とも絶望的な表情。

○モニター

八木の取調べ映像。

八木「（笑いながら）合意の上なんて考えられないよ。嫌がるのを無理やり犯すから気持ちいいんだよ。わかんねえかなあ。山があるから登ると同じなんだよ。ひひ。も

ちろん、最後に首絞めるのもセット。レイ  
プと殺しはセットなんだよ。最後に首絞め  
るとさあ、キュッと・・・」

○死刑囚監房・独房内

モニターに映し出される自分の映像を  
見つめる八木―

青ざめ、震えている。

近江、見るに見かねて、

近江「もう、やめようか」

停止スイッチを押そうとするが―

八木が手で制して、首を振る。

近江「・・・」

死者をあざ笑う自分の姿を見つめ続け

る八木―

かみしめた唇から血が流れる。

近江「・・・」

○純喫茶ナイン・店内（夕）

店の奥―

目立たない場所に座る、加藤と周子。

二人の前にはコーヒー。

マスターは静かにグラスを磨いている。

周子「メモリーは、全部消しました」

加藤「・・・」

周子「加藤先生も忘れてください」

加藤「・・・」

周子「本当に、どうかしていたんだと思います。教師という仕事が変わらなくなって、やけになつていたんだと思います」

加藤「・・・」

周子「でも、もう大丈夫。今日、決心がつきました。私、教師を続けます。ですから、忘れてください。お願いします」

加藤「・・・うん」

周子「ありがとうございます」

周子、ホツとしたようにコーヒーを飲む。

加藤「あ、あの、私でよければ、また相談に」

周子「（即、きっぱり）けっこうです」

加藤「・・・」

周子「メモリー、消してくださいね」

加藤「・・・はい」

周子、コーヒーを飲む。

○同・表（夕）

周子と加藤、別々の方向に去る。

周子は足早にまっすぐ、加藤は未練がましく振り返りながら――

二人と入れ替わりに、陸奥がやって来る。

○同・店内（夕）

コーヒーを淹れているマスター。

カウンターの陸奥――

陸奥「インドに行こうと思って」

マスター「え？」

陸奥「何でインド哲学なんか選んだのか。偏差値とか合格率で適当に選んだ可能性の方が高かったりもしますが、僕のメモリー――

の中でまともそうなものって、インド哲学を  
選択したってことだけなんですよね。だか  
ら、一からやり直すのなら、一番まともな  
選択を糧にしてやり直そうかなって」  
マスター「うん。いいんじゃないですか」  
と言いながら、陸奥の前にコーヒーを  
出す。

陸奥「そうですか？」

マスター「うん。いいと思いますよ」

陸奥「ありがとうございます」

陸奥、コーヒーを口にする。

陸奥「ん・・・」

マスター「え？」

陸奥「マスター。これ・・・」

マスター、あわてて自分もコーヒーを  
いれ、飲んでみる。

マスター「あ」

陸奥「ね」

もうひとくち。陸奥もひとくち。  
二人、顔を見合わせて、微笑む。

どうやら、失われた味に到達したらしい。

○ユーチューブ画面

タイトルは「生ごみ男の日記#01」  
テーブルに山積みされた缶ビール。

生ごみ男（声）「えー、はじめましてー。生ごみ男と申しますー。何で生ごみかという  
とですねー、まあ、生きている価値もない  
奴というような感じですねー。はは。みじめな男ですよー。ぶっちゃけ、いい大学行ったりしてるんですけどねー。はは。そんなの、もうどうだっていいんですよ。何か、1年半もつきあった女にふられた、みじめなヤローなんす。死んだ方がいいんで、そのうち死のうと思うんですけどねー。とりあえず、それまでのみじめな日々を記録し  
ところと思いまーす。おい、見てるかー、ナナミ、このヤロー。はははー。というわけで、第1回目の今日は、とりあえず、酒

におぼれてみようと思いまーす。定番です

ねー。はは」

缶ビールを取り、開けてー

生ごみ男（声）「かんぱーい」

飲んで、むせる。

○加藤家・キッチン（夜）

エプロン姿の美智子が夕食をつくって  
いる。

加藤、入ってきてー

加藤「ただいま・・・」

美智子「あ。おかえりなさい。あの、すぐで

きますから。着替えてください」

加藤「・・・すいません」

美智子「え？」

加藤「いや、何か、ごはんとか・・・」

美智子「あ、いいんです。仕事もしてないし、

出かける用事があるわけでもないし。とり

あえず、専業主婦のようなことをしてみ

いるだけですから」

加藤「・・・」

美智子「着替えて、手を洗ってきてください」

加藤「・・・はい」

と、奈奈美も帰ってきて―

奈奈美「・・・ただいま」

加藤「あ、おかえり」

美智子「（同時に）おかえりなさい」

奈奈美「・・・ただいま」

何か恥ずかしくて、照れ笑いする加藤  
と美智子。

○同・ダイニング（夜）

美智子のつくった夕食が並ぶテーブル

―につく加藤、美智子、奈奈美。

美智子「さあ、どうぞ」

加藤「うん・・・ありがとう」

美智子「・・・」

奈奈美「ありがとう」

美智子「・・・どうぞ」

加藤「いただきます」

奈奈美 「いただきます」

美智子 「いただきます」

3人、食べ始める。

加藤 「美味しいです」

奈奈美 「うん。美味しい」

美智子 「ありがとう」

○同・キッチン（夜）

風呂からお湯が流れる音―

美智子、一人で座っているが―

エプロンのポケットから、折りたたん

だ紙を出す。

美智子 「・・・」

離婚届―美智子の署名と捺印はすんで

いる。後は加藤に渡すだけだったらし

い。

美智子 「・・・」

美智子、離婚届を静かに破り、バラバ

ラになった紙片を再びエプロンのポケ

ットの中に―

立ち上がり、洗い物をはじめ。

○私立病院・産婦人科病棟（夜）

○同・分娩室前（夜）

里香の叫び声が響き渡る――

○同・分娩室内（夜）

医師や看護師を吹き飛ばしそうな勢いで叫ぶ里香。

その手を握り、励ます一柳。

一柳「がんばれ。がんばれ・・・」

里香「！！！（絶叫）」

一柳「（も絶叫）がんばれへええええ！」

○シェアハウス・玄関内（朝）

いくつもの段ボール箱が積み上げられている。

大きなトランクとキャリーを持った三井と四谷。悦子が見送る。

悦子「今さらだけど、出て行くんなら、あたしが行くよ。どのみち、こんないいところ、一人じゃ住んでらんないし」

三井「大丈夫。すぐに見つかるって」

四谷「一から生活やり直したい奴、多いだろ

うし（苦笑）」

悦子「でも・・・」

三井「じゃあ」

言いながら、さっさとドアを開けて出て行く三井。

悦子「あ・・・」

何か言おうとした時にはもうドアが閉まる。

悦子「・・・」

四谷「じゃあ、オレも」

悦子「・・・」

四谷「またね」

悦子「うん・・・」

四谷、出て行くー

悦子「・・・」

○同・キッチン

一人になった悦子。コーヒーを飲みながら、一枚の写真を見ている。

サプライズパーティーの夜に3人で撮った写真―手書きで「エッチ― ミツチ― ヨツチ― なかよち―」と書かれている。

悦子「・・・エッチ―て（苦笑）」

と、玄関のチャイムが鳴り―

悦子「あ、は―い」

写真をおいて、玄関へ―

○死刑囚監房・面会室

ドアが開き―

近江に付き添われて、八木が入ってくる。

ガラスの向こうに、本間宏・康子夫妻が座っている。

二人とも、戸惑いや恐れがまざった複

雑な表情で八木を見ている。

近江にうながされて、夫婦の前に座る

八木。

何か言おうとするが、言葉が出ない。

とー

本間「まどかの父です」

八木「・・・」

本間「来るべきかどうか迷いました」

八木「・・・」

本間「正直、私たちは、娘のことを全く思い  
出せないのです」

その言葉に、康子が泣き始める。

八木「・・・」

本間「今は、正直、まどかがあなたに殺され  
たということよりも、私たち自身がまどか  
のことを思い出せないということの方がつ  
らい・・・」

八木「・・・」

本間「娘に、申し訳なくて・・・」

本間も泣き出す。

八木「・・・」

二人の嗚咽が続く。

八木、のどからしぼりだすように――

八木「・・・すいませんでした」

言っつて、深々と頭を下げる。

近江「・・・」

八木、頭を下げたまま――

○純喫茶ナイン・店内

TVで死刑執行のニュースが流れている。

女子アナ(TV)「IBO以後、死刑が執行

されたのは初めてです・・・」

TVに目を向けることもなく、静かに

コーヒーを淹れるマスター。

女子アナ(TV)「・・・今朝、中国北京で、

日中韓の外相による初の会合が開かれまし

た。リセット外交と名づけられた会合の一

回目で・・・」

今日のブレンドの香り確かめる。

○ユーチューブ画面

陸奥の最後の投稿―無題。

陸奥、カメラをまつすぐに見て、語りかける。

陸奥（PC）「どうも、生ごみ男です。本当は、陸奥陽平と言います。何か、今までいろいろ投稿してたみたいですけど、これが最後になります。これまでの投稿は全部消してしまいたいんですけど、やめておきます。何か、あの情けない自分も、やっぱり自分なので。とりあえず、一からやり直します。っていうか、世界中の人がそうだと思います。と思いますが。とにかく、頑張ります。皆さんも、頑張ってください。それでは、さよなら。ボンボヤージュ」

コメント欄に並ぶ「アホか」「ボンボヤージュで・・・」「死ね」などの誹

謗中傷―

その中にごくわずかだが、「がんばれ」

「オレも頑張る」「これからこれから」  
等、励ましのコメントも見える。

やがて、「ボンボヤージュ」ばかりが  
並び始めて・・・

「ボンボヤージュ（笑）」

「ぼんぼやーぢゅ」

「ボンボヤ〜」

「ボンボヤージュ」

「ボンボヤージュ！」

「ボンボヤージュ！」

「ボンボヤージュ！」・・・

「ボンボヤージュ」の大合唱の中ー

（了）